KURENAI : Kyoto University Research Information Repository

Title	『岩野泡鳴全集』未収録作品と初出未詳作品の調査報告
Author(s)	王, 憶雲
Citation	京都大学國文學論叢 (2013), 29: 25-33
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/173579
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

『岩野泡鳴全集』未収録作品と初出未詳作品の調査報告

王　憶雲

小稿は、臨川書店『岩野泡鳴全集』（平六・一〇～平九・七、以下『臨川書店版全集』と略）に収録されていない岩野泡鳴の文章一点（①）の紹介と、初出紙誌未確認の作品七点（②③④⑤⑥⑦⑧）の調査報告を行い、若干の考察を加えるものである。

『臨川書店版全集』第一六巻には、単行本未収録で初出未詳の泡鳴作品が収録されている。これは、「国民図書版『泡鳴全集』に収録されてはいたが、現在に至るまで初出の確認できなかったもの」（紅野敏郎「解説・解題」）である。初出情報の確定は、旧全集と呼ばれた、国民図書株式会社から出された『泡鳴全集』（大一〇・一～大一一・七、以下『国民図書版全集』と略）の編集事情や泡鳴関連の雑誌・人物などを再考することに繋がる。

以下に、その作品と説明を記していく。

①「日本深山に怪奇の異人」

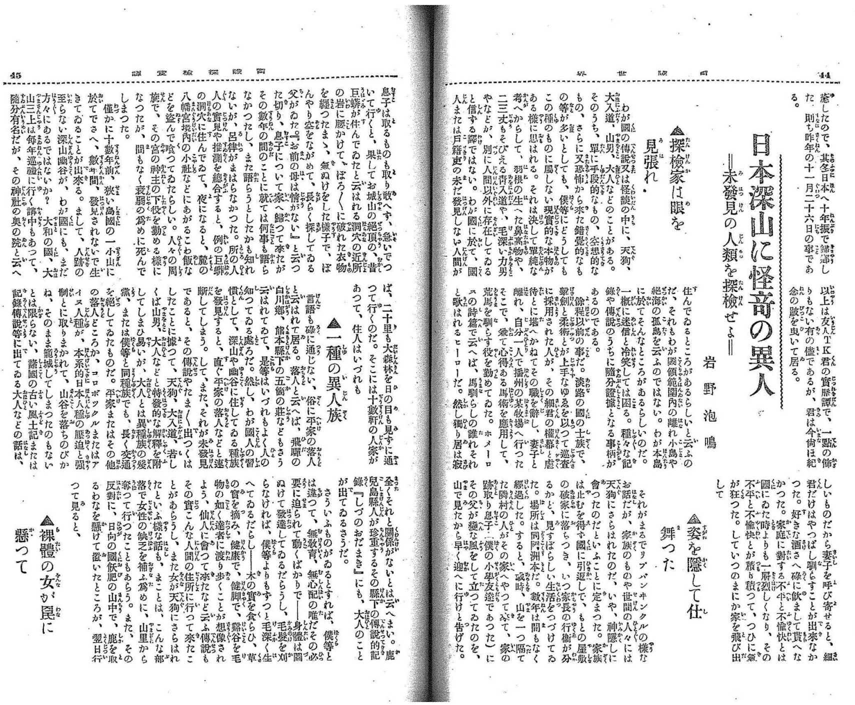
明治四二年八月五日発行の「冒険世界」第二巻第九号「冒険探検実譚」欄（目次では「冒険探検奇譚」とあり）に発表（四四頁～四七頁）。三段組、総ルビ。『国民図書版全集』、『臨川書店版全集』ともに未収録。

同欄にトルコ、南洋、北極の怪奇な話が掲載されているが、泡鳴は日本の部分を担当している。遠野の山中に未発見の人種がいるという話について、泡鳴は文章の末尾に「僕の友人で、法制局参事官を勤めてゐる柳田国男君が、近頃、同郷の有志家を招いてその実談を筆記した。僕の茲に書き入れた材料も多くは同氏から出てゐるのだ。」とその話の出所を説明している。この「同郷の有志家」は佐々木喜善のことで、その話を筆記したものとして、柳田の『遠野物語』は翌年の六月に出版された。泡鳴と柳田は同じ龍土会の要員であり、泡鳴は柳田主催のイプセン会にも熱心に参加していた。

「冒険世界」誌上への執筆は、おそらく当時の編集兼発行人押川春浪（方存）と関係していると考えられる。詳しくは⑥「故押川春浪の事」の項目を参照されたい。

以下に冒頭部分の図版と全文を掲げる。

日本深山に怪奇の異人
＝未発見の人類を探検せよ＝



癒したので、其冬日本へ十年振で歸鄕した。則ち昨年の十一月二十六日の事である。

以上は友人TK君の實歴譚で、一點の飾りもない有の儘であるが、君は今尚ほ紀念の跡を曳いて居る。

日本深山に怪奇の異人
―未發見の人類を探檢せよ―

岩野泡鳴

▲探檢家は眼を見張れ

わが國の傳説又は怪談の中に、天狗、大入道、山男、大人などのことがある。そのうち、單に手段的なもの、空想的なもの、さらに又恐怖から來た錯覺的なもの等が多いとしても、僕等にどうしてもこの種のものに屬しない現實的な本物がある樣に思はれる。それは決して單純な考へからして、羽根の生へた鼻高物や、二三丈もそびえる靑入道や、毛深い力男やなどが、別に人間以外に存在してゐると信ずる譯ではない。わが國に於て、國人または戸籍吏の未だ發見しない人間が住んでゐるところがあるらしいと云ふのだ、それもわが國領範圍内の離れ小島や絶海の孤島を云ふのではない。わが本島に於てそんなところがあるらしいのだ。一概に迷信と冷笑しては困る。種々な記錄や傳説のうちに隨分證據となる事柄があるのである。

餘程以前の事だ。淡路の國の士族で、擊劍と柔術とが上手なゆゑを以つて巡査に採用された人が、その細君の權幕と虐待とに堪へかねてその職を辭し、妻子と離れ、自分一人で播州の某牧場へ行つたそこで、兼て心得ある馬術を應用して、荒馬を馴らす役を勤めてゐた。ホメーロスの詩篇で云へば、馬馴らしの誰れそれと歌はれるヒーローだ。然し獨り居は寂しいものだから妻子を呼び寄せると、細君だけはやつぱし馴らすことが出來なかつた。好きな酒さへ碌に飲まして貰へなかつた。家庭に對する不平と不愉快とは國にゐた時よりも一層烈しくなり、その不平と不愉快とが積り積つて、つひに氣が狂つた。していつのまにか家を飛び出して

▲姿を隱して仕舞つた

それがまるでリプバンヰンクルの樣なお話だが、家族のものや世間の人々には天狗にさらはれたのだ、いや、神隱しに會つたのだといふことに定まつた。家族は止むを得ず國に引返して、もとの屋敷の破家に落ちつき、いつ家長の行衛が分るかと、見すぼらしい生活をつづけてゐた。場所は同國洲本だ。數年は間もなく經過した。すると、或時、山を一つ隔てた隣村の人がその家へやつて來て、家の跡取り息子（僕の小學友達であつた）にその父が變な風をして立つてゐたのを、山で見たから早く迎へに行けと告げた。

息子は取るものも取り敢へず、急いでついて行くと、果してお城山の絶頂の、昔巨蟒が住んでゐたと云はれる洞穴の近所の岩に腰かけて、ぼろ〳〵に破れた衣物を纏つたまゝ、氣ぬけをした樣子で、ぼんやり空をながめて、長らく探してゐる父がゐた。『お前の母は情がない』と云つた切り、息子について家へ歸つて來たが、その數年の間のことに就ては何事も語らなかつたし、また語らうとしたかも知れないが、呂律がまはらなかつた。所の人人の實見や推測を總合すると、例の巨蟒の洞穴に住んでゐて、夜になると、麓の八幡宮境内の小社などにあがるこわ飯などを盜んで喰つてゐたらしい。人々の周旋で、その宮の神主の下役を勤める樣になつたが、間もなく衰弱の爲めに死んでしまつた。

僅かに十數年前、狹い島國の一小山に於てでさへ、數年間、發見されないで生きてゐることが出來る。まして、人跡の至らない深山幽谷が、わが國にも、まだ方々にあるではないか？ 大和の國、大山三上は毎年巡禮に行く講中もあつて、隨分有名だが、その神社の奥の院と云へば、二十里も大森林を日の目も見ずに通つて行くのだ。そこには十數軒の人家があつて、住人はいづれも

▲一種の異人族

言語も碌に通じない、俗に平家の落人と云はれて居る。落人と云へば、飛騨の白川鄕、熊本縣下の五箇の莊などもさう云はれてゐて、是等はいづれもよく人の知つてゐる處ろだ。然し、わが國人の習慣として、深山や幽谷に住してゐる種族を發見すると、直ぐ平家の落人などと速斷してしまう。して、また、それが未發見であると、その傳説やたま〳〵出つくはしたことに據つて、天狗、大入道、若しくば山男、大人など特發的な解釋を附してしまひ易いが、大人とは異種族の殘黨、または僕等と同種族でも、長く交通を絶してゐたものだ。平家またはその他の落人どころか、コロボックルまたはアイヌ人種が、本系的日本人種の壓迫と强制とに取りまかれて、山谷を落ちのびかね、そのまゝ籠城してしまつたのもないとは限らない、諸國の古い風土記または記錄傳説等に出てゐる大人などの話は、全くそれと關係がないとは云へまい。鹿兒島縣人が珍重するその縣下の傳説的記錄『しづのおだまき』にも、大人のことが出てゐるさうだ。

さういふものがゐるとすれば、僕等とは違つて、無敎育、無心配の唯だその必要に迫られて動くばかりで――身體は圖ぬけて發達してゐるだらうし、毛髮を刈らなければ、僕等よりもずつと毛深く生へてゐるだらし――木の實を食らひ、草の實を摘み、健康で、健脚で、谿谷を毛物の如く逹者に渡り歩くことが想像されよう。仙人に會つて來たなど云ふ傳説もその實こんな人間の住所に行つて來たことがあらうし、また女が天狗にさらはれたといふ樣な話も、まことは、こんな部落で女性の缺乏を補ふ爲めに、山里から奪つて行つたこともあらう。また、その反對に、日向の國飫肥の山中で、鹿を取るわなを懸けて置いたところが、翌日行つて見ると、

▲裸體の女が罠に懸つて

▲探検家は眼を見張れ

わが国の伝説又は怪談の中に、天狗、大入道、山男、大人などのことがある。そのうち、単に手段的なもの、空想的なもの、さらに又恐怖から来た錯覚的なもの等が多いとしても、僕等にどうしてもこの種のものに属しない現実的な本物がある様に思はれる。それは決して単純な考へからして、羽根の生へた鼻高物や、二三丈もそびえる青入道や、毛深い力男やなどが、別に人間以外に存在してゐると信ずる訳ではない。わが国に於て、国人または戸籍吏の未だ発見しない人間が住んでゐるところがあるらしいと云ふのだ、それもわが国領範囲内の離れ小島や絶海の孤島を云ふのではない。わが本島に於てそんなところがあるらしいのだ。一概に迷信と冷笑しては困る。種々な記録や伝説のうちに随分証拠となる事柄があるのである。

余程以前の事だ。淡路の国の士族で、撃剣と柔術とが上手なゆゑを以つて巡査に採用された人が、その細君の権幕と虐待とに堪へかねてその職を辞し、妻子と離れ、自分一人で播州の某牧場へ行つたそこで、兼て心得ある馬術を応用して、荒馬を馴らす役を勤めてゐた。ホメーロスの詩篇で云へば、馬馴らしの誰れそれと歌はれるヒーローだ。然し独り居は寂しいものだから妻子を呼び寄せると、細君だけはやつぱし馴らすことが出来なかつた。好きな酒さへ碌に飲まして貰へなかつた。家庭に対する不平と不愉快とは国にゐた時よりも一層烈しくなり、その不平と不愉快とが積り積つて、つひに気が狂つた。していつのまにか家を飛び出して

▲姿を隠して仕舞つた

それがまるでリプバンヰンクルの様なお話だが、家族のものや世間の人々には天狗にさらはれたのだ、いや、神隠しに会つたのだといふことに定まつた。家族は止むを得ず国に引返して、もとの屋敷の破家に落ちつき、いつ家長の行衛が分るかと、見すぼらしい生活をつづけてゐた。場所は同国洲本だ。数年は間もなく経過した。すると、或時、山を一つ隔てた隣村の人がその家へやつて来て、家の跡取り息子（僕の小学友達であつた）にその父が変な風をして立つてゐたのを、山で見たから早く迎へに行けと告げた。息子は取るものも取り敢へず、急いでついて行くと、果してお城山の絶頂の、昔巨蟒が住んでゐたと云はれる洞穴の近所の岩に腰かけて、ぼろ〳〵に破れた衣物を纏つたまゝ、気ぬけをした様子で、ぼんやり空をながめて、長らく探してゐる父がゐた。『お前の母は情がない』と云つた切り、息子について家へ帰つて来たがその数年の間のことに就ては何事も語らなかつたし、また語らうとしたかも知れないが、呂律がまはらなかつた。所の人人の実見や推測を総合すると、例の巨蟒の洞穴に住んでゐて、夜になると、麓の八幡宮境内の小社などにあがるこわ飯などを盗んで喰つてゐたらしい。人々の周旋で、その宮の神主の下役を勤める様になつたが、間もなく衰弱の為めに死んでしまつた。

僅かに十数年前、狭い島国の一小山に於てでさへ、数年間、発見されないで生きてゐることが出来る。まして、人跡の至らない深山幽谷が、わが国にも、まだ方々にあるではないか？　大和の国、大山三上は毎年巡礼に行く講中もあつて、随分有名だが、その神社の奥の院と云へば、二十里も大森林を日の目も見ずに通つて行くのだ。そこには十数軒の人家があつて、住人はいづれも

▲一種の異人族

言語も碌に通じない、俗に平家の落人と云はれて居る。落人と云へば、飛騨の白川郷、熊本県下の五箇の荘などもさう云はれてゐて、是等はいづれもよく人の知つてゐる処ろだ。然し、わが国人の習慣として、深山や幽谷に住してゐる種族を発見すると、直ぐ平家の落人などと速断してしまう。して、また、それが未発見であると、その伝説やたま〳〵出つくはしたことに拠つて、天狗、大入道、若しくは山男、大人などと特発的な解釈を附してしまひ易いが、大人とは異種族の残党、または僕等と同種族でも、長く交通を絶してゐたものだ。平家またはその他の落人どころか、コロボツクルまたはアイヌ人種が、本系的日本人種の圧迫と強制とに取りまかれて、山谷を落ちのびかね、そのまま籠城してしまつたのもないとは限らない、諸国の古い風土記または記録伝説等に出てゐる大人などの話は、全くそれと関係がないとは云へまい。鹿児島県人が珍重するその県下の伝説的記録『しづのおだまき』にも、大人のことが出てゐるさうだ。

さういふものがゐるとすれば、僕等とは違つて、無教育、無心配の唯だその必要に迫られて動くばかりで、——身体は図ぬけて発達してゐるだらうし、毛髪を刈らなければ、僕等よりもずつと毛深く生へてゐるだらし（ママ）——木の実を食らひ、草の実を摘み、健康で、健脚で、渓谷を毛物の如く

達者に渡り歩くことが想像されよう、仙人に会つて来たなど云ふ伝説もその実こんな人間の住所に行つて来たことがあらうし、また女が天狗にさらはれたといふ様な話も、まことは、こんな部落で女性の欠乏を補ふ為めに、山里から奪つて行つたこともあらう。また、その反対に、日向の国飫肥の山中で、鹿を取るわなを懸けて置いたところが、翌日行つて見ると、

▲裸体の女が罠に懸つてゐた。これは徳川幕府文政年間のことだわが国一般の種族以外のものでなければ裸体で出あるく女や罠の何たるかを知らないものがあらうか？

またかういふ話がある。飛騨の山中で樵夫が何だか異様な入道に出会つたが、余りおそろしいので、携へてゐたにぎり飯をやつた。すると、それを甘さうに喰つた。翌日、また同じところにやつて来たが、今回はみやげに珍らしい木の実を持つて来てにぎり飯と交換した。之を聴いた別な樵夫が、翌日出て行つてそれを鉄砲で打ち殺した。して、そのまた翌日行つて見ると、倒れてゐる大人のそばに、大きな女が独り坐はつて泣いてゐたさうだ

陸中の国遠野郷では、よくそこらの女が盗まれるさうだが、その山中が深いだけに、未発見の人間がゐるらしい。その郷人の極近い伝説といふよりも、寧ろ実験談のうちに、山びらき小屋で餅を焼いてゐたところが、例の異人がやつて来てそれを欲しさうな様子を見せたので一つやると、よろこばしさうにぐひ呑みにした。翌日も来たので、真ッかに焼いた石ころを喰はした。すると、翌日、その者は近所の谷合ひで

▲根笹で編んだ三尺のわらじを穿いたまゝ死んでゐた。三尺とは、怖いので大きく見えたのだらう。

わが国の人類学者等や古物学者等は眠つてゐる。坪井博士一流の筆法で、徒らに外国人のこしらへた人類学などをそのまゝに套襲しチンパンジーでなければ、コロボクルなどの説明を繰り返し、少しも独得の研究を初めない。たまに何かやり出すと、丸山を発掘して芝公園の風致をそこねたり、お穴さまを掘り散らして迷信家連の恨みを買ふくらゐのことだ。人類学や発掘学を持て遊んでゐるに過ぎない、僕等が在りと信ずる未発見の人類などは、到底、彼等に話したつて分るまい。僕等は、それが為めに、世の大胆有為の探検家諸君に望むところが多いのだ。

未発見人類探検に目的となるべき地方は、以上挙げた外に、まだ岩代の南、会津、只見川の上流で最も遠い山里から二十里ほど這入つた深山にはゐるらしい。また、岩舟郡の三面は徳川時代に分つたのだが南蒲原郡には、明治になつてから発見された部落があつて、近頃まで戸籍がなかつたのだ。

遠州の奥山は、その入り口の京丸までしか人跡は這入つてゐない。或時、

▲大きな牡丹の花が流れて来たので、上流にさかのぼつて行くと、絶壁の上は、一面に牡丹の花盛りであつたさうだ。

木曽の御嶽山のふもとにも、世間と交通しない部落があ

るさうだ。

また、駿河の奥で、井川といふのは――そこの郷主は海野氏――馬の飼ひ方を知らない人間の部落だ。そのまた奥へはまだ這入つて見たものがない。

未発見人類存在の信仰がよしんば過去の事実に当つてゐたとしても、諸君が探検によつてそれを確め得ただけ有効ではないか？　まして現在の事実らしい証拠も諸方の談柄にのぼつてゐるのだ。遠野郷の最近伝説の如きは、僕の友人で、法制局参事官を勤めてゐる柳田国男君が、近頃、同郷の有志家を招いてその実談を筆記した。僕の茲に書き入れた材料も多くは同氏から出てゐるのだ。同氏はこの事に就て非常な信仰と研究とを持つてゐる。若し諸君にして僕があげた目的地につき、なほ詳しくその実際を知りたいなら、柳田君に就いて糺し給へ。

②「日本現代の新体詩界」

明治四一年一月一〇日発行の「宇宙」第二巻第一号に発表（三三頁～四七頁）。署名は東京子。二段組、ルビ僅少。誤字・闕字・衍字の類が非常に多く見られる。なお、後述の③「東京通信」も同号に掲載される。

泡鳴「新体詩史」（明四一・一〇脱稿）の第七章「第七期（明治三九年以後）」の内容に相当するものと認められる。「新体詩史」は、泡鳴生前に出版されず、死の直後に編集された『国民図書版全集』第一四巻に、『新体詩作法』（明四〇・一二、修文館）などと併せて収録された。そこでは最初に「はしがき」がつけられ、単行本の形にまとめられている。「新体詩史」所収の文章が、明治四〇年から四二年にかけて「新思潮」「文章世界」「太陽」などの雑誌に発表されていることは、大久保典夫「解説・解題」（『臨川書店版全集』第一一巻）に詳しい。しかし、「宇宙」掲載分については従来言及されてこなかった。

「新体詩史」の「はしがき」によると、泡鳴が最終的に脱稿したのは、「日本現代の新体詩界」より後である。両者を比較すると、「新体詩史」第七章において大幅な加筆と削除、詩の置き換えのあることが判明した。また、書誌的な情報が加えられた箇所や作家の肩書き・作品名を「新体詩史」第七章で改めた箇所が多く見られる。

ここに加筆された箇所だけを記しておく。「新体詩史」第七章に大幅に加筆されたのは、次の五箇所である。『臨川書店版全集』第一一巻の頁を示しつつ、以下に記す。

・二四五頁下段「今一つ云つて置くべきは、」から、二四六頁下段「まだその特色を認められる作ではなかつた。」まで。
・二四九頁上段「して、その自然主義派でないその自然派的傾向の影響は」から、二四九頁下段に引用されている鷗外の詩『雫』の末尾まで。
・二五〇頁上段「乃ち、『闇の盃盤』、『褄とる君』」から二五〇頁下段「燃えて　のぼる。」に終わる『闇の盃盤』の引用まで。
・二五四頁下段「さきに挙げた鉄幹の『詩話』は、」から、二五七頁下段に引用されている泡鳴の子守唄『笛の音』の末尾まで。
・二五八頁上段「この詩史稿を書いた年、」から最後まで。

対して、「日本現代の新体詩界」の「序に云つて置くが」から末尾まで（「宇宙」四七頁）が削除された。以下にその箇所を掲げておく。

序に云つて置くが、英語詩人が帰朝して間もなく、渠の思ひ付きで、日英米同合の『あやめ会』なるものが設けられ、わが国の重もな詩人に、英国のアーサーシモンズ、キリアム　イーツ等、米国のオー　キンミラーチャールス　スタダード等、外国詩人二十名ほどが加盟して、定期刊行詩集を出すことになつた。其第一集『あやめ草』は三十九年六月に出で、第二集『とよはた雲』は四十年一月に出た。其他現の代詩を読まうとする諸君に便する為め、諸家のをもな詩集を挙げると、有明氏の『春鳥集』並に『独絃哀歌』、泣菫氏の『白羊宮』並に『二十五絃』、泡鳴氏の『夕潮』並に『悲恋悲歌』（此両著は『泡鳴詩集』として一冊にまとまつたのがある）、林外氏の『夏花少女』、花外氏の『ゆく雲』、酔茗氏の『塔の影』、小山内薫氏の『小野の別れ』、上田敏氏の訳詩集『海潮音』等である。また、おもな新体詩をよく裁せる雑誌は、『太陽』、『早稲田文学』、『新思潮』、『文章世界』、『新小説』等で、其アマチユア的な習作をも裁せるのは『明星』、『渠人』、『文庫』、『新声』等である。過去一年間程は、出版界が辞書類並に実業的書類にいそがしくて、文芸物は、小説の方はまだ出るが、おもな詩人の詩集さ出へずに居る状態である。近頃僕は『新体詩作法』といふものを出版する。名は至極通俗だが新体詩の種類、音律、格調、修辞等に就てこれまで世間がはつきりと知らなかつた点を明かに説明した専門的研究である。また、『新体詩史』なるものを著述中で、材料を集めて居る。この出版は明年になるだらうと思ふ。

この箇所で泡鳴自身は、『新体詩作法』を近頃出版する計画と、「新体詩史」の執筆に関する状況とを語っている。この説明は、「新体詩史」本文の生成過程を理解するのに重要な手がかりとなろう。「新体詩史」の「はしがき」を書く際に、泡鳴は「この『詩史』に残つたのは、今見れば、ただ材料の滓であるかの様な気がする」と弱音を吐いており、出版に躊躇している心情を窺わせる。

削除された代わりに、「新体詩史」第七章の末尾に、明治四一年の詩壇の動きを述べる箇所が追加されているが、これはもちろん、「日本現代の新体詩界」の発表時点では書くことのできない事柄である。

泡鳴は「新体詩史」をまとめ上げたものの、結局単行本としては出版されなかった。ただ、脱稿の翌年二月に、第七章までの内容は、「太陽」第一五巻三号臨時増刊「明治史第七編　文芸史」に「第四編　新体詩界」として発表された。「太陽」所収の「新体詩界」本文に関して、前出の大久保氏は「普通なら初出というべきものだが、これもまた、定本（旧全集の「新体詩史」）を注文の枚数に合わせて圧縮・要約したものだ」と説明している。しかし、第七章においては、「新体詩史」と「新体詩界」との間に、段落の分け方が異なる箇所はあるものの、異同は殆ど見られない。「新体詩史」第七章は、明治四一年一〇月までに「宇宙」所収の「日本現代の新体詩界」をもとに修

正・加筆したものであり、それをそのまま「太陽」に「新体詩界」として発表したものと認められる。

③「東京通信」

明治四〇年一一月一〇日、一二月一〇日発行の「宇宙」第一巻第七号、第八号に掲載された「東京通信」は『臨川書店版全集』第一一巻に収められているが、『国民図書版全集』第一七巻には、この「東京通信」の続きが収録されている。それについて、『臨川書店版全集』第一六巻の紅野敏郎「解説・解題」は、「その後の「宇宙」に掲載されたかと推察されるが、未確認」と述べている。「宇宙」とは、サンフランシスコにある青木大成堂から出された在日邦人向けの雑誌である。青木大成堂の出版事情に関しては、日比嘉高「北米移民と日本書店――サンフランシスコを中心に――」（「立命館言語文化研究」平二〇・九）が詳しいが、管見によれば「宇宙」と泡鳴との関係に言及する先行研究はまだない。ここでは「宇宙」に見出される泡鳴に関する問題点を述べておく。

稿者は国立国会図書館所蔵、明治四一年一月一〇日発行の「宇宙」第二巻第一号（七六頁～八五頁）に「東京通信」の続きの一部を確認した。二段組、ルビなし。末尾に「(以下次号)」の記載がある。

第二巻第一号に掲載されたこの「東京通信」は、二つの部分に分かれており、その間に「東京商業会議所外国通信係B、B、M、生」の「十二月十六日東京発信」という短い文章（八一頁～八二頁）が挟まれている。「東京通信」の前半は「現皇帝陛下の御生母」から「もう首縊め台が転ずるのを待つまでのことになった。」（『臨川書店版全集』第一六巻、二四五頁～二四九頁）までであり、後半は「前前通信で云つた大演習は」から「真鍮及黄銅は十六万四千余円を増加して居る。」（二四九頁～二五一頁）という一文に終わる。全集の本文との間に大きな異同は認められないが、残念なことに、全集に収録された「わが皇太子殿下の韓国御巡遊は、」以降の文章（二五一頁～二六〇頁）は依然として確認できない。稿者の調査した限り、「宇宙」は、国立国会図書館に所蔵される、第一巻第六、七号、第二巻第一号しか残されていない。また、『臨川書店版全集』によれば、第一巻第八号に泡鳴の「幼馴染」（小説）と「東京通信」の一部を確認したというが、稿者はこの号の存在を確認できず、実見に及んでいない。

第一巻第七号の「東京通信」は、岩野泡鳴の名前で掲載されているが、第二巻第一号の本文においては、前半の執筆者は「東京子」、後半は「岩野泡鳴」となっている。また、目次では前半後半の分別はされておらず、作者も「東京子」としか表示されていない。第一巻第六号奥付にある次号予告に、「本社は高橋五郎岩野泡鳴の両君を東京通信者と定めて故国文壇其他の通信一切を依嘱せり」とあるから、前半を担当する「東京子」は高橋五郎である可能性も残る。ただし、前項で述べたように、同号にある「東京子」の執筆した「日本現代の新体詩界」は、泡鳴の「新体詩史」第七章の一部にあたるものであるから、「東京通信」の「東京子」もやはり泡鳴である可能性は高いと思われるが、同号の「東京通信」に「岩野泡鳴」「東京子」という二つ名前の表記が存在しているのも事実である。

④「思索力の欠乏せる現文壇」

明治四二年五月一五日発行の「秀才文壇」第九巻第一一号に発表（二頁～八頁）。二段組、総ルビ。目次では「欠乏」と表記されているが、本文の表題には「缺乏」とある。末尾に「四十二年四月二十二日稿」と記載。同号には服部嘉香「実感詩論」や相馬御風「子（翻訳）」が掲載されている。

『国民図書版全集』第一八巻に収録される際に、「小説読者と現代文界の欠陥」と改題された。初出と全集本文との間には、冒頭と文末に異同が見られる。また、文末の加筆は、評論の単行本のために追加したもののように思われるが、この評論は泡鳴のどの単行本にも収録されていない。（「―」以降が全集本文）

冒頭　現代文界の欠陥はどこにあるかを云ふに先立ち文芸の読者のことを考へて見給へ。文界といへば、→現代文界の欠陥はどう云ふところにあるかと云ふ問題を秀才文壇記者が持つて来たを幸ひ、ここに暫く之が思案をして見よう。文界といへば、

末尾　地方にも沢山出て来なければ嘘だ。／（四十二年四月二十二日稿）→地方にも沢山出て来なければ嘘だ。それから、また、これも思索力の不足から来ることだが、言語を乱用して、心にもないことを発したりする悪弊が多過ぎる。これは然し別に述べよう。（明治四十二年四月）

⑤「夢遊病的犯罪者」

明治四三年二月五日発行の「刑事法評林」第二巻第二号「有声無声」欄に発表（九四頁～九六頁）。二段組、ルビなし。同欄には小杉天外「芸術上の犯人」も掲載。

「刑事法評林」は啓成社から発売された刑事制度関係の研究雑誌で、発行人は堀由蔵。第一巻第一号（明四二・九・一七）の「発刊之辞」に「本評林は現行の刑法、刑事訴訟法、其他刑罰法規の解釈に資せむとするは勿論、刑事制度に対し直接間接に関係を有する制度、就中監獄並に未成年犯罪者に関する諸般の問題を研究して、犯罪より生ずる個人国家及び社会の苦痛危険を防止し、人類の向上発展を期するに在り」と記している。

この評論で泡鳴は狂人の問題を取り上げ、「此等は法医学上の研究題目であるが、又文芸上の問題として、(ママ)も面白い材料である」と述べている。この号の前後にも文学者の文章が多く見られる。たとえば、第二巻第一号には中島孤島・吉野臥城、第三号には後藤宙外、第四号には児玉花外の文章が掲載される。また、第八号には上田敏「犯罪と文芸」がある。

『国民図書版全集』第一一巻に収録される際に、「滑稽の趣味」（「女学世界」明四〇・五）と併せ収められ、その一部になった。全集本文との間に、誤植の訂正や句読点の変更が見受けられるが、大きな異同は認められない。

⑥「故押川春浪の事」

大正四年一月一日発行の「冒険世界」第八巻第一号に発表（一二八頁）。三段組、ぱらルビ。『臨川書店版全集』第一五巻に収録されているが、解題に初出未詳とある。初出と全集本文の間には、誤植を訂した箇所が一つあるほか、異同は認められない。

泡鳴は明治二四年から二七年にかけて仙台神学校（のちの東北学院）に在籍していた。そのときの校長は創立者でもある押川方義で、その息子の春浪も在籍していた。泡鳴は押川方義の

ことを第二の父親として慕っており、春浪とも親密な付き合いのあったことが、この追悼文からも見て取れる。

⑦「信州行の印象」

「俳味」第六巻第一号に発表（八二頁～八三頁）。目次に「第五拾六号」とある。東京大学総合図書館所蔵の同号には奥付が欠落しているが、第六巻第二号の情報によると大正四年一月の発行と推測される。一段組、ぱらルビ。

全集本文との間に異同が認められるのは、一箇所のみ。初出八三頁の三行目に「旅館の客室に」とあるが、『国民図書版全集』と『臨川書店版全集』には「旅館の各室に」とある。

⑧「今の芝居に対する苦情七ヶ条」

大正八年九月一〇日発行の「新演芸」第四巻第一〇号臨時増刊読者号に発表（一六頁～一七頁）。三段組、総ルビ。

この臨時増刊読者号は、岡村柿紅「読者号発行に就いて」によれば、「此に於てこの読者号の企てゞ、これまで発表する機会のなかつた一般見物諸君の言説の為に全部解放することになつた」という趣旨で、読者から原稿を集めて編集されたものである。ただし雑誌の最初に「読物」の欄があり、そこに文学者が書いた作品も載せられている。泡鳴以外に、楠山正雄・秋田雨雀・小山内薫などの劇評も掲載されている。

全集本文との間に大きな異同は認められない。ただ、全集の末尾に大正二年の日付があるが、初出にはない。初出の発表時期から見ると、全集の日付は誤りの可能性が高い。

［付記］
引用に関して、漢字は通行の字体を用い、ルビを適宜略した。⑦「信州行の印象」については永渕朋枝氏から御教示を得た。また、閲覧の許可を下さった各所蔵機関に深謝申し上げる。

（おう　おくうん・致理技術学院応用日語系助理教授）